

論争続く「支配の形」

奈良時代を通して、陸奥は現在の宮城県が実質的な勢力範囲だった。宮城県以北がどうだったか。全く中央と関係がな

っていた北限が、宮城県9世紀、800年以降。70年代に起こったエミシとの大規模な戦争が、きっかけになった。

その後、この地(岩手)にフロンティア(支配域)の境界が広がり、いわゆる奥六郡が成立したの

この戦争は、実に37年間続いたといわれている。みなさんも、坂上田村麻呂やアテルイという名前がご存じだと思う。

この37年間の戦争を経て、北上川中流域がよいよ面的に支配された。

つみの郡が置かれ、律令法に基づく支配が行われた。胆沢城と当初は志波城(後に移転し徳丹城)、この二つの拠点を楯田の

焦点のようにして南と北でその中間を支配した。実は、宮城県内でも支

配がそのように行われた。多賀城が有名だが、多賀城だけではなかつた。その多賀城も、当初は今の位置ではなく、仙台駅南方の長町の辺りにあり、名称も多賀城ではなかつた。

大平 聡氏 (宮城学院女子大教授) 基調講演

「鎮守府胆沢城から鳥海柵へ」

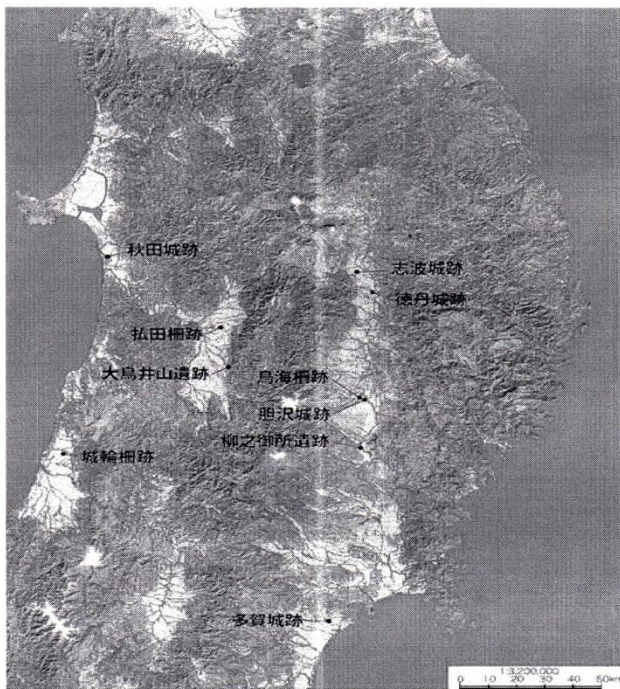
鳥海柵を知る

金ケ崎の国指定史跡

金ケ崎町の国指定史跡・鳥海柵跡は、11世紀空白の東北古代史を解明するとともに、律令国家による支配から自立し、平泉で結実する奥州平泉文化の起源などを知る上で重要な遺跡。町は、同柵跡の歴史的価値を町民と共有する場として毎年シンポジウムを開催し、保存・活用に向けた機運を高めている。今年も2月に町中央生涯教育センターで開かれ、さまざまな研究成果が示された。大平聡・宮城学院女子大学教授の基調講演要旨と、パネルディスカッションの内容を連載で紹介する。6月までの毎週土曜日付に掲載。(菊池藍)

— 2014 シンポジウムより —

1



「平安時代の東北地方の主要遺跡」国土数値情報(河川、海岸線、湖沼、標高・傾斜度5次メッシュ)。国土交通省 金ケ崎町教育委員会調査報告書掲載図に一部加筆

多賀城だけではなかつた。その多賀城も、当初は今の位置ではなく、仙台駅南方の長町の辺りにあり、名称も多賀城ではなかつた。

多賀城だけではなく、沢城と志波城(後に徳丹城)の中間地域を、郡を置いて面的に支配する方が広かつた北上川中流域

生館(なまぐら)官衙遺跡」と呼ばれている遺跡があり、この二つが南北の拠点だった。それからもう一つ。牡鹿柵(ましかざら)と私は推測しているのだが、東松島市の赤井遺跡を加えた三つの施設が拠点となり、宮城県にあたる陸奥国を面的に支配していた。

これと同じ方式で、胆沢城と志波城(後に徳丹城)の中間地域を、郡を置いて面的に支配する方が広かつた北上川中流域

奥六郡は、胆沢鎮守府が支配した。陸奥国を南北二つに分けて、南は多賀城国府、北は鎮守府が管轄したという考えが、広く受け入れられてきた。

しかし、21世紀に入り、若手の研究者・淵原智幸さん(元京都大学非常勤講師)が、鎮守府將軍はあくまで軍事的指揮官であつて、民政は多賀城国府が行つたとする説を唱えた。

つまり、陸奥国が広かつても管轄は多賀城国府。胆沢城に鎮守府が置かれたが、同時に多賀城から国司が派遣されてきて、国司によって民政が行われたのだという説を提案された。これはかなり大きな衝撃があり、現在もその論争が続いている。(つづく)

おことわり 毎週土曜日付2面連載の「集まれ! たんこう元気ツッパ」は6月いっぱい休載とし、7月から再開します。